2024 トップインタビュー
サステナビリティ経営の針路

川金ホールディングス 鈴木 信吉社長

発想転換し、「第二の創業期」に挑戦

「KX」で〝変容〟へ 高付加価値市場へのシフト加速

――2024年3月期の業績は。

「前期は売上げ、営業利益とも2期連続で過去最高を更新できた。当社には大きく三つ事業があるが、鋳物などの素形材事業は出荷量が落ち込んだ。一方、高速道路向け免震装置などを扱う土木建築事業は引き続き出荷量が伸びた。結果的に土木建築事業が素形材事業の落ち込みをカバーし、業績をけん引した。油圧機器や成形機などの産業機械事業も堅調だった」

――昨年10月に創立75周年を迎えた。

「1948年の川口金属工業設立から数えて75年となった。これを記念して、昨年10月20日の創立記念日には海外を除いたグループ横断による社内イベントを、さいたまスーパーアリーナで開催した。日本全国から従業員1千人と、その家族も含め合計1300人弱が参集。第1部は運動会、第2部は有名芸能人を迎えてアトラクションを開催した。国内の全グループが一堂に会したのは今回が初めて。非常に盛り上がった」

――創業100周年に向けての展望を。

「これまでの75年は鋳物業を発祥とするモノづくりの会社として事業を継続できた。しかし、これからは発想の転換が必要となる。従来のように受注したものを製造するだけでなく、当社から市場が求める素材や形態、組み合わせなどを提案して製造する能動的な会社にならなくてはならない。同時にモノづくりだけでなく、設計や解析、分析、調査といったエンジニアリング機能も事業化していきたい」

「当社ではこうした新たな試みに『第二の創業期』として挑戦し、次の75年、つまり創業150周年に向けてグループを進化させていく。今期から3カ年の第5次中期経営計画がスタートしているが、ここで100周年に向けた基盤づくりに取り組む」

「今中計ではKX（カワキン・トランスフォーメーション）を大きなテーマに掲げた。これは川金グループとして会社の在り方や仕事の進め方を〝変容〟させることで生き残っていく決意を表している」

――グループの共通スローガン「Tomorrow's Technology, Today」とは。

「総合的なテクノロジーや未来の技術をいま提供できる会社になろうという意味。2008年の川金HD発足時からのキーワードだが、KXを達成する上で忘れてはいけない考え方であり、改めてグループに浸透させている」

――事業の〝選択と集中〟に関して進捗は。

「価格競争に陥りやすい汎用品の市場から、我々の独自技術を生かせる付加価値の高い市場へのシフトを各事業で進めている。一例として素形材事業では半導体製造装置関連、土木建築事業では橋梁用や建築用の支承が挙げられる。着実に進んではいるが、進展度合いは3～4割と道半ば。さらなる進展を図るべく、技術力を有する企業やアドバイザーなどとの協業も含め鋭意検討している」

――グループ連携の取り組みについて。

「これまでグループ各社は個社ごとの事業活動が主体だったが、今期からグループ横断での複合的な研究開発や営業活動をスタートさせた。まずはグループ各社が互いの技術や営業内容をしっかり理解するようタスクフォース（TF）を組織した。技術TFでは『ナノキャスト』やニレジスト鋳鉄、免制震デバイスなど当グループの幅広い技術の棚卸しに取り組んでいる。グループ各社の人的な交流も深まり、非常に有意義な活動だ。TFもKXの一環と位置付けている」

――海外展開に関しては。

「昨年10月、川金コアテックがトルコのイスタンブールに支店を開設した。現地採用の支店長とスタッフで、免制震デバイスの販売を始めている。トルコの免制震デバイスに対するニーズは堅調。当面は日本で製造した製品をトルコ向けに出荷していく方針だ」

「当グループには中国・大連市にロストワックス製法を手掛ける子会社、大連［林］精密鋳造がある。1989年設立と日本企業としては極めて早い中国進出で、当初は業績に大きく貢献した。しかし、近年の中国市場の変調を考えると事業リスクを慎重に見極めていく必要があると考えている」

（小堀　智矢）